清野謙次蒐集敦煌寫經の行方

高田時雄

大阪の F 氏から家藏の資料中に狩野直喜、濱田耕作、羽田亨など昔の京都大學の先生方の筆跡がかなりあるが、興味があるかというご連絡を頂き、幾つかのサンプル畫像を送っていただいた。中には少し不鮮明なものもあったので、それではいっそのこと直に拝見しようというので、一日 F 氏宅にお邪魔して御所藏の品々を見せていただいた。F 家は清野謙次博士の後裔である。清野家は後嗣に惠まれず、實弟に當たる方を養嗣子として迎えたが、男子がなく、結局女系の F 家で清野博士の遺品を受け繼いでいるとのことである。

清野謙次（1885〜1955）は病理學、人類學、考古學など幅広い分野に極めて多彩な業績を殘したユニークな學者であった。1921 年京大醫學部教授となり、翌年生體染色研究の業績に對して帝國學士院賞を受けている。1938 年、故あって京大教授を辭職、やがて東京に居を移し民間の學者として活動した。非常な收集家であり、自らの研究材料として生涯に集めた資料は極めて大量に上るが、それらのうち日本各地の遺蹟から出土した人骨は京都大學自然人類學研究室に、考古民俗資料は大阪府立近つ飛鳥博物館に、藏書は東京大學や天理大學などにそれぞれ安住の地を見出している。

清野は典籍の筆寫を趣味とした。天性の筆忠實によって書き寫された書物は、現在 F 家に殘されているものだけでも、記紀萬葉、風土記など日本のものから、孝經、孟子、三略六韜等々に至るまで相當數ある。丁寧な楷書で作られた寫本はみな立派な裝本が施され、鮮やかな水莖の跡を今に留めている。清野はまた交遊のあった名家に揮毫を求めて樂しむのが常であったようで、F 氏の作成されたリストによれば、高橋是清、西園寺公望から与謝野晶子まで、その數は總計 141 名に及ぶ。狩野、濱田、羽田等諸教授の文字もそれらの一部というわけである。こうした名家の筆跡が寫本の諸處に散りばめられているのを逐一見ていくだけでも、興味が盡きない。直ぐに退散する積もりが、結局夕刻まで居座ってしまい、定めし F 氏も迷惑と思われたことであろう。

燉煌出土清野藏書目錄
十二 隋大業四年寫大般涅槃經一卷
十七 唐寫法華經一卷
二七 唐佛名經一卷
一四 妙法蓮華經 奥書則天武后天子一卷
一三 開元十年寫大般涅槃經一卷
一八 唐初寫般若般羅密經一卷
一五 大曆九年寫妙法蓮華經一卷

図 1:「燉煌出土清野藏書目録」(部分)

さてこの書寫趣味の行き着くところ、天性の蒐集癖も相俟って、清野は前後して古寫經の蒐集に極めて大きな情熱を注ぐようになる。なかでも當時最も貴重視された敦煌寫經についても、可成りな數量を所藏していたことが知られている。戰前の京都で、敦煌寫經のコレクターと言えば、先ず守屋孝藏に指を屈せねばならないが、そのコレクションは現在すでに京都國立博物館に收まり、立派な圖録も公刊されている。しかし清野コレクションについては、その行方についてよく知られていなかった。およその憶測は不可能ではなかったが、確實な證據がなかった。今回、偶然のきっかけで、その憶測を確認し得る材料を得たので、それを簡單に報告しておきたい。敦煌寫本研究者にとって座右の書である商務印書館編『敦煌

遺書總目索引』[1]の「四、敦煌遺書散録」には、その第 13 として「日本諸私家所藏燉煌寫經目録」が掲載されており[2]、その末尾に清野謙次の藏品 19 點が見える[3]。この「日本諸私家所藏燉煌寫經目録」は同處にもはっきりと明記してあるように『昭和法寶目録』第一卷（1929 年 8 月刊行）所收の「燉煌本古逸經論章疏幷古寫經目録」に據ったものである[4]。これが清野謙次の舊藏敦煌寫本に關する公刊された唯一の情報である。ところが F 家には清野自筆の「燉煌出土清野藏書目録」なるものが保存されていた（圖一）。實はこの目録は昭和 14 年（1939 年）10 月 27 日、所藏の敦煌經卷を羽田亨に讓渡した時のものである。その數 40 卷（38 卷と 2 册）。『昭和法寶目録』所收點數の倍以上となり、この 10 年間に清野が繼續して蒐集を行っていたことがよく分かる。一方、羽田の方もその蒐集した敦煌寫本の手控えを殘しており[5]、その中に罫紙二枚に書かれた同一の目録が含まれている。この目録も清野の手になるものだが、末尾に清野と羽田が署名押印してあり、讓渡を取り決めた證文といった性格のものである。兩者には基本的な違いはないが、F 家のものには各經卷それぞれの査定額が清野によって記入されている。以下がその目録である。『昭和法寶目録』所收のものには◎を附し、更に經名の前に「散録」の番號を記入して便宜を圖ることとする。各項最後の數字が査定額である。

燉煌出土清野藏書目録

◎十二[6]、（1076）隋大業四年寫大般涅般[7]經一卷　650.-

十七、唐寫法華經一卷　380.-

二七、唐佛名經一卷　40.-

◎一四、（1082）妙法蓮華経（奥書則天武后文字）一卷　650.-

◎一三、（1077）開元十年寫大般涅般經一卷　350.-

一八、唐初寫般若波羅密經一卷　230.-

◎一五、（1078）大曆九年寫妙法蓮華經一卷　250.-

◎一一、（1083）隋開皇廿年摩訶般若波羅密經一卷　380.-

◎一六、（1081）武成二年寫雜寶藏經一卷　750.-

◎三七、（1092）律攝卷第五（唐咸通四年寫）一卷　185.-

三八、唐時物價單殘紙（吐魯番出土）一卷　120.-

二〇、唐寫比丘戒一卷　200.-

二〇、唐寫比丘尼戒一卷　200.-

三九、藏文無量壽名大藏經一卷外藏文經二卷合計三卷　150.-

◎三七五、（1080）大梁貞明六年寫佛畫入佛名經二卷[8]　1000.-

---

[1] 1962 年 5 月、北京、商務印書館刊、1983 年 6 月、北京、中華書局重印。

[2] ちなみに敦煌研究院編の『新編』（2000 年 7 月、北京、中華書局刊）では「散録」がなくなっているので、元版を見る必要がある。

[3] その通番 1076～1094。

[4] 通し番號を新たに附した以外は、基本的に極めて忠實な移録であるが、最後の 1094「仙名經第五」はもちろん「佛名經」の誤寫である。

[5] この手控えに關しては、落合俊典「羽田亨著《敦煌秘笈目録》簡介」（『敦煌文獻論集』、遼寧人民出版社、2001 年）を參照。また羽田の敦煌寫本蒐集については拙文「明治四十三年 (1911) 京都文科大學清國派遣員北京訪書始末」『敦煌吐魯番研究』第 7 卷（2004 年）を參照されたい。

[6] 羽田目に含まれるものには、羽田の手で若干の訂正や注記が施されているが、この番號は十三を十二に、五番目の十二を十三に入れ替えている。ちなみにそもそもこの番號が一體何であるのかが不明である。推測するに、清野がその入手した古寫本全部に順次通し番號を附していて、賣却に際して敦煌寫本だけを抜きだしたため、このような不連續な數字になったものであろうか。

[7] 涅槃を涅般と書き、また波羅蜜を波羅密とするような誤字があるが、清野の書癖として今はすべて訂正せず、元のままとした。

[8] この二卷、羽田の注記によれば卷四及び卷十六である。ちなみにこれは清野「佛名經書寫由來記」（昭和 11 年 1 月 14 日記）でも確認される。ただし『昭和法寶目録』及び『敦煌遺書總目索引』「散録」では卷第十六とのみあるから、卷第四は、1929 年以降に入手したものである。

六一一、燉煌小斷片四種二軸　80.-
◎五四、（1086）大般若經卷四九[9]、完全一巻　42.-
◎六〇、（1084）大般涅般經卷三三、完全元軸一巻　40.-
◎五九、（1087）大佛頂經第一（完全、元軸）一巻　30.-
◎六一、（1094）佛名經第五、一巻　105.-
五八、四分律刪補隋機羯磨卷下一巻　40.-
◎五七、（1089）摩訶般若波羅密經第三（六朝寫）一巻　56.-
◎五六、（1093）佛説藥師經一巻　45.-
五五、救諸衆生苦難經一巻　35.-
四八、摩訶般若波羅密經、一巻（第十六）　40.-
◎五一、（1085）妙法蓮華經卷六、一巻　40.-
◎五二、（1086）大般若經九三卷、一巻　50.-
五〇、佛名經卷十二、一巻　120.-
◎四九、（1088）金光明最勝王經第五、一巻　65.-
五三、大般若經三七[10]、一巻　70.-
四五、大般涅般經卷廿一（完美）一巻　75.-
四六、佛名經第一五、一巻　75.-
◎四七、（1090）維摩經卷上一巻　80.-
◎番號不明、（1079）華嚴經（六朝寫）一巻　100.-
三七六、羅振玉舊藏燉煌經斷片折本二册　150.-
以上四拾卷（三八卷、二册）

以上が目録の本文で、その後に以下の一文が書き添えられている。

右之目録を現物に添へて京都帝大総長羽田亨氏に差出す事に決定す。（中略）現物に添へて別に目録二通を差出し、受取りを貰ふ事とせり。昭和十四年十月廿七日

これは先に觸れた羽田手控え中の讓渡契約書と完全に一致する。ちなみにその末尾部分には「以上四〇卷（三十八卷、二册）」として目録を書き終えた後に次ぎのように記されている。

右之通りに有也
昭和十四年十月廿七日
清野謙次（押印）
右之通り御願致候也
羽田　亨（押印）

再度 F 家の資料に戻ると、上の一文に續けて、以下のような領收書の寫しが書かれている（圖二）。

右の書籍賣れたるに就き、左の領收書を渡せり。

領收書
一金　八仟五百円也
右　燉煌出土書類四拾卷（三拾八卷二册）之代價として正に領收仕候也。
昭和十四年十一月　日
清野謙次

[9]『昭和法寶目録』及び『敦煌遺書總目索引』「散録」では卷三十九とするものがこれに當たるか。存疑。
[10]『昭和法寶目録』及び『敦煌遺書總目索引』「散録」に見える「大般涅槃經卷第三十七」がこれに當たるか。存疑。

羽田亨殿

これによって、清野謙次の所藏敦煌寫本がすべて羽田亨に讓渡されたことを確認できる。その價格は 8500 圓、相當な金額である。ただ不可解なのは、清野がそれぞれの經卷に附した金額を合算すると 6873 圓にしかならないという點である。総額 8500 圓は、上の領收書の寫しに明記されている上、羽田目にも餘白に鉛筆で 8,500 と書かれてあることからも間違いがない。ちなみにこの數字は羽田の筆跡である。ではなぜこの齟齬が生じたか。思うに清野の記録に書き込まれた個々の金額は、自身による見込みであったか業者に依頼しての査定額であったかはともかく、清野側の提示額の基礎となる數字であった。羽田はそれをかなり上回る金額で引き取ったということになる。普通の取引としては考えにくい。推測を逞しくすれば、その前年に京都大學を辭職して幽居中の友人に對する心遣いが働いたということは十分に考えられる。讓渡の約束は 10 月 27 日であるが、領收書は 11 月の日付である。羽田はその間に資金提供者と細かに折衝したであろう。

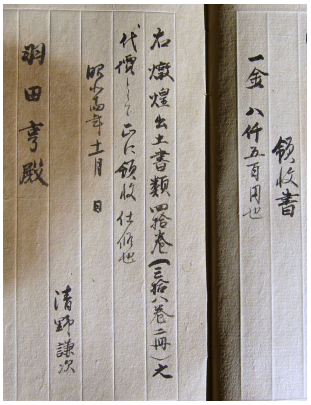

図 2: 「領收書」（寫し）

清野謙次舊藏の敦煌寫本が全部で 40 種あり、これまで知られていた數よりかなり多いこと、それら全部が昭和 14 年に羽田亨に讓渡されたことがこれで明らかとなった。極めて遺憾なことは、これらが同じく羽田のイニシアティヴによって日本に齎された李盛鐸舊藏寫本一括 432 點とともに、大戰末期資金提供者のもとに送られたまま、今日なお未公開であるという事實である。一日も早い公開が待たれる。